

大ベシと早笛

山中 玲子

天狗の登場に奏される大ベシは、ゆったりと力強い囃子で、鬼畜や竜神の登場楽である早笛がスピード感溢れる囃子であるのと対照的である。が、元来この二つの囃子は同じ物で、演奏の仕方が違っていただけらしい。以下では、大ベシと早笛が個別の囃子事として分化し固定してくる流れを、概観してみたいと思う。

鴻山文庫蔵の『笛秘書集』（弘治三年奥書）は「護法。をしたてたる出は也。はや太鼓にてハなし」というように、出端を「早太鼓」から区別している。太鼓の打ち方にそう沢山の種類が在ると思えないし、早い出端と早笛の違いは僅かかも知れないが、とにかく別の囃子事として分けているのである。ところがその一方で、「車僧、はや太鼓」「鶺鴒かひ、一段きうなるはや太鼓也」の如く、現在の大ベシと早笛に相当する囃子については、ともに「早太鼓」の名で呼び、緩急の差を説くのみである。また、天文四年奥書の『加納入道

如作筆太鼓伝書』（鴻山文庫蔵）も

ハヤ太鼓之心持。…本ノ鬼ヲバハヤク打。

松ノ山鏡・ウカイノ類。又ゼガイノ類ハ、ノリテ静ニユルリト打ネバ能ガシラヌ也。

と、やはり鬼と天狗の登場楽を「早太鼓」と一括したうえで、緩急やノリの違いを言う。

このような扱い方は他の囃子伝書にも多く見られ、早笛と大ベシはもとと同じ囃子事として認識されていたことが窺われる。

それでは何の為に演奏法を変えるのかという点、それはもちろん鬼と天狗の違いを表現する為だろう。能の中に「天狗」というジャンルが生まれた時、囃子伝書ではおおむね、本当の冥土の鬼（力動）ではない砕動の鬼として、天狗を位置付けたようだ。

一、鬼のはやし的事。ぜがい・鞍馬天狗同物也。惣じて大ベシ又あくぜうハのりてはやす也。

一、はやき鬼のこと。小ベシ也。たとへばうかひ・松の山鏡同物也。よくよくめんな

ど見てはやすべし。力どのはやし是也。さびどろのはやしとハのることなり。

（由良家蔵『鼓之書物事』享祿五年奥書）
のような説は、諸書に見られるものである。

鬼と天狗は、人間でも草木でも神でもない異形の物として取敢えず括る事ができる。そのうえで、世阿弥以来綿々と続く、力動・砕動の対や、使う面による演じ分け、という伝統に沿ってこの二者を位置付けた結果、同じ「早太鼓」で登場を囃しながらも、緩急やノリ、手の違いなどで、各々の雰囲気^(注)に合った演奏をするという習いが生まれたのだろう。

具体的演奏法については、太鼓の場合、右の他にも「大ベシミヲキタル時ハ、太鼓静にのりて打べし。余の面の時ハ早ク打べし」(『節章句秘伝之抄』)「天狗ハあらめに。打あがる心持にて可打也」(鴻山文庫蔵『天文廿三年観世国広伝書』)等の発言があり、当然ながら、傍線部に対応する緩急やノリの違いの説は笛の側にもあるが、笛の場合はさらに「大天句ナドノ早笛ハ…干ガチニ吹也。又、…インヤウノ手ナドモ小天工ニ吹事也。

惣別、手コマサクレタルモノナル間、小天工ニ吹也」(『矢野一宇間書』)の如く、音の高さ(干がちに吹くか否か)や「手」の有無等、後の唱歌で跡付けられる様な差にも触れている。が、この段階ではあくまで、同じ囃

子事のヴァリエーションという発想と見てよ
いだろう。装束や面によって登場案が変わる
というのも、厳密には大ベシと早笛の交換で
はなく、同じ「早太鼓」の演奏法の違いとし
て捉えるべきだろう。太鼓が打つ手やノリが
違ったり笛の唱歌に多少の違いが在ったとし
ても、その場その場で臨機応変に出物の人体
にふさわしい手を奏することは、昔の囃子に
とって日常茶飯事だった筈だし、そのような
差は、ちょうど、同じ序ノ舞でも△定家▽と
△半部▽では位が違い、△定家▽の場合はオ
ロシに特殊な手を奏することがあるのと、同
次元の問題なのだと思う。

その臨機応変の工夫や表現の為の装飾的な
手が、時代とともに固定化し譜として定着し
て、大ベシミを掛けた時は常にこう演奏する、
小ベシミを掛けた時はこうだ、というように
決まってきた時に、それぞれ別の囃子事とし
て扱われることになり、早笛・大ベシという
独立の囃子事が成立するわけだが、それは以
下の如く、江戸中期頃のことらしい。

現行の早笛と大ベシの唱歌の最も大きな違
いは、早笛は大ベシより「リリトヒトルロ。
ヒヨヒヨウヒヨウロ」(一噌流唱歌による)
というニクサリ分、地(何度も繰り返される
基本単位)が長いということだが、大蔵虎明
(寛文二年没)の記した『聞書并笛集』(『古

本能狂言』所収)や鴻山文庫蔵『森田流笛之
秘事』(貞享頃の内容)に記された小ベシミ
用の早笛の唱歌には、この特徴的なニクサリ
が無く、大ベシミ用の早笛と殆ど変わらない
譜になっている。また、『聞書并笛集』は、
後にニクサリ分、別の唱歌も載せているが、
「リリトヒ…」とは違う譜である。

小ベシミの面を掛けて登場する出物を囃す
「早笛(≡早太鼓)」に手が多いことは先に
引いた『矢野一宇聞書』にも説かれていた。
江戸中期以後の唱歌付には、早笛の「替手」

が多く記されているが、右の二書の段階では
未だ、「リリトヒ…」も多くの(現在では埋
れてしまつて知ることのできない)手の一つ
に過ぎなかつたので、特に書き留められてい
ないのだろう。本来特殊な手の一つだった
「リリトヒ…」の部分が、江戸中期頃までの
間に、いつも演奏する物として「地」に組み
込まれ定型化して行き、他の手の幾つかが
「替手」として書き留められるに至った、と
いう流れが考えられると思う。

小ベシミ用と大ベシミ用で地の構造やクサ
リ数が違つたら、それはもう別の囃子事と言
うべきである。この段階で大ベシと早笛は個
別の囃子事として分化したと言えよう。

(注) 小田幸子氏『善界』演出の歴史(『観世』昭和
63年12月号)参照。

(法政大学能楽研究所員)